

特集

本との出会い



■新学長特別寄稿:英国の図書館での感動的経験

■世界の図書館探訪:オランダに資料調査に訪れて

英国の図書館での感動的経験

筆者が図書館を利用する頻度は多くない。従って、図書館に関する注文もそれほど大きなものではない。しかし、図書館の機能に対しては、日ごろから敬意を表しているものの一人である。ここでは、図書館にかかわるごく個人的な経験を披露させていただき、図書館の役割についての感想を述べてみたい。

筆者の経験では、若い時期には科学技術の分野、特に下水や排水の微生物処理の分野を研究していたので、その専門の分野での内外の雑誌のバックナンバーがあれば、おおよそ論文作成には十分であった。それは、専門化された分野の中では、特にその分野での初心者
の時期には、周辺の研究分野にまでは注意が行き届かず、とりあえず狭い分野での研究者としての居場所を確認することが必要であるからである。

しかし、このようなレベルにとどまっている限り、新たな発展にはたどり着かないことがやがて明らかになる。そこで、他の分野の成果を理解し利用しようという好奇心と探究心がきっかけとなって、今度は周辺分野の論文集に関心が広がり、それらの論文集を求めて、他分野の図書館を探すことになる。論文集を中心とする検索となるのは、それぞれの時期の最新のデータは論文集に投稿されているからであり、教科書的な著書を探すことは案外少ない。

一般化はできないが、相対的に若い時期には当然に、オリジナルな論文の作成に最大の努力を注ぐことになるが、当該研究分野の中でも、シニアな立場に立つようになると、当該分野にかかわる総説的な論文を書くことの依頼が増えたり、教科書をまとめるような機会が増えることになる。総説や教科書を書く段になると、そのテーマについての歴史的な発展にかかわる記述が不可欠になる。こうなると、最新の論文を中心とする関心だけでは、それらの原稿をまとめていくには不十分になる。

そこで、これまでの教科書的な参考文献を当たる必要が出てくるが、このときには、個人的な蔵書だけでは限りがあり、どうしても有力図書館の助力が必要となる。少ない経験ではあるけれど、筆者の集大成としてまとめた『環境学』（岩波講座・現代工学の基礎 No.9）においては、川越の工学部分館にあった『技術の歴史』（筑摩書房）には大変お世話になった。この大作は、名前は聞いたことがあったが、現物を見たことはなかったものであった。工学部分館で、現物に接し内容を確認することで、これまでの浅学を思い知ら

されたところであった。

もうひとつの例が、英国における資料探しの事例である。これは、下水道の初期の考えかたを改めて確認したくなったことがあり、ロンドンの工学図書館（Engineering Library）（工学図書館といっても主として土木工学の資料を揃えている図書館であった。それは工学の応用分野は土木工学（Civil Engineering）から始まっていることを確認する機会でもあった。）を訪ねたときの話である。ロンドンの下水道は19世紀後半から本格的な建設が始まるが、当時の設計図がそのまま残されているのである。カラー刷りで手書きと思われる精密な図面で当時の下水道の構造やそれにかかわる考え方が鮮明に描かれているものであった。

しかも、最も感動的であったのは、来意を告げると図書館司書に相当すると思われる年配の係員が、保存書庫と思われる部屋まで案内してくれて、大きな書棚から100年以上前の書籍や図面をいろいろ説明しながら数冊取り出して、閲覧スペースへ出してくれるのである。感動したところは、そのような古いものがよく保管されているという事実と併せて、その担当者の極めて慣れた手さばき振りにあった。突然の来訪者で、しかも限られた特殊なテーマの資料に対して、何の迷いもなく、数ある保存図書の区画の中から適切に資料を探してくれる熟練さは、そのプロフェッショナルとしての技量の高さとプライドの高さにおいて、ただ尊敬の念を持つところであった。

図書館の機能についていえば、保存図書を直接確認しながら探せる機能（熟練した職員を含めて）が必要である。書名だけではアプローチできない余分な情報の中に、最も貴重な情報が得られることもあることを大事にしたいと考えるものである。

松尾 友矩 (まつお ともり)

東洋大学学長。国際地域学部教授。
専門：都市環境論、環境学
東京大学大学院数物系研究科修士
課程修了。工学博士。
著書：『循環型社会構築への戦略』
(中央法規 共著)



『21世紀の環境予測と対策』（丸善 共著）

本との出会い

本は私たちの知性と感性を豊かにしてくれます。本との出会いは、親から本を読んでもらうことから始まるかもしれません。その出会いは空間的に広がり、自宅の本棚、本屋、学校や地域の図書館へといろいろな場所で体験することになるでしょう。図書館はそのひとつの大きな出会いを提供します。

特集では、本学関係者から「本との出会い」について執筆していただきました。さあ、新学期です。図書館の扉を大きく開いてみましょう。素敵な「本との出会い」が待っていますよ。

本と私

本と私との関係で生涯忘れられないことがあります。昭和15年春、当時学生で遊びを覚えて小遣が不足がちでしばしば親に要求していました。「不足の理由は何だ」と親父から厳しい質問。「本代が高くつくので」と一応納得させました。当時父は市長をしていたのでしばしば上京し、ある日突然下宿先にお礼方々挨拶に来ることになりました。私は友人から沢山の書籍を借りて書棚を一杯に埋めたのですがやはり少ない。そこで本をケースから出して別々に陳列しました。親父は書籍を睨みつけ「お前はなぜ同じ本を二冊も買うんだ」と本とケースを引き出してきたので「それは今読んであるので・・・」と説明したが、三、四冊同様に空っぽのケースだけ引き抜いたので弁解が出来なくなりました。「本を買うなら一冊でよい」と云って30円貰ったことがあります。厳しい無言の折檻でしたが、ごまかしは通用しないことを痛感しました。

後年のある時税務署が私の関係している会社のビルを調査しましたが、その三つの部屋が図書や記念品のようなもので満杯状態。この部屋の賃貸料は塩川に対する贈与になるという見解を云ったので、私は書籍を処理しようと思いましたが、多忙で手がつけられない。昨年の春頃から近隣の大学や機関に相談しましたが分類、選別の基準やその費用負担等、何れも官僚的な対応でむしろ迷惑そうなので当方から拒否しました。その結論として、私が永年会長を勤めてきた大阪府立八尾高等学校同窓会館内の図書館に引き取って貰うことになり、昨年9月頃から分散してある本を集めて整理にかかりました。本の種類は無差別で分類など出来そうにない。しかも自費で買ったものは約3割位、他は官公庁や会社の記録集、報告書等で寄贈のものが多

いのです。同窓会長や役員と相談して先ず私に因縁のある塩心会を名付けた塩心会文庫をつくることにし、その着手に政府及び議院刊行の内閣百年史等周年誌や外交白書、経済白書等の報告書を集め始め、目下遅ればせながら進行中であります。東洋大学の百年史や井上円了先生、福沢諭吉先生全集等は私の履歴の証明でありますので家宝に準じて保存することになっています。

整理を手伝ってくださる教員が、図録に大変興味をもっておられます。最近のものとして東京国立博物館での西本願寺展、大阪市立美術館の丸山応挙展や、横浜市立美術館の東山魁夷展、又は、毎年秋開催される奈良正倉院展等の図録は、まことに貴重なもので将来歴史的記録として尊重されるであろうと、収集保存してきたことに大きい賛辞をいただいております。

終戦直後占領軍のドッジ経済構造改革やシャープ税制等の改革解説書を感慨深く手に握りしめました。又、当時の岩波文庫本など、当時の物資不足の実態が書物に的確に反映されており、まことに貧弱且つ惨めなものです。昭和30年代までは自費購入で且つよく読んだ形跡が残っているので懐かしいです。私は、本は好きで衝動買いも多いのですが、買った本は他人に譲ったり捨てたりはしません。読まなくても大切に保存しています。

[次頁へ続く](#)

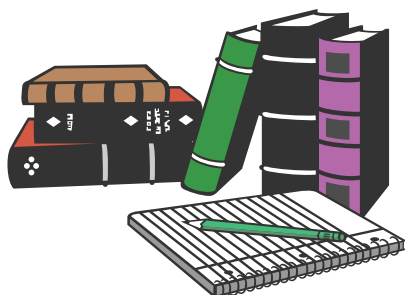
塩川 正十郎 (しおかわ まさじゅうろう)

学校法人東洋大学総長
元学校法人東洋大学理事長
(昭和63年12月6日
～平成12年12月6日)
文部大臣、財務大臣等歴任
慶應義塾大学経済学部卒業



昭和42年衆議院議員になって以降急激に外部から寄贈をうけたりして書物が増えたのですが、その中で自分が読みたいと思って買ったもので、未だ手をつけていない本も多数発見しましたので、政界引退後、それらを積極的に読破しています。例えば、ドナルド・キーン『明治天皇 上・下』、池宮彰一郎『平家』等所謂歴史ものが好きであります。これらは読み終わって明治天皇や平清盛に従来から抱いていたイメージを多少変えなければならぬと思いました。やはり歴史教科書的記述でなく、人間味豊かな素晴らしい人物像が投影されていることに喜びを感じました。又、政策研究大学院大学教授の松谷明彦『人口減少社会の設計』及び東京大学大学院経済学研究科教授の吉川洋『構造改革と日本経済』を勉強しましたが、財務大臣在職中の読書であれば参考に応用出来たのにと残念に思っています。

本を読むには視力はもちろんですが、体力が必要であることを痛感します。私は50歳代までは読むのが早かったし、又、9ポイント位の小さな文字でも苦勞なく読んでいましたが、最近は小さい活字は読む気がしません。Eメールなどで送られてくる文章は一切読めませんので、電話で聞き返す次第でありますから、書物も読みたいと思うよりも「これだったら読める」が選択の基準になります。又、私の読書は東京・大阪の往復移動中が一番はかどるのですが最近はこの駄目で、乗車と同時に居眠りをします。従って、現在は専ら早朝です。毎日ではありませんが、午前5時頃目覚めて1時間か2時間が私の読書時間です。読書力は衰退しました。例の『明治天皇 上・下』約1,100頁読むのに約5週間かかり情けなくなる気持ちであります。現役を引退してロスタイムを満喫しようとしているとき読書もその貴重な一つであることを思うと、私の余生は何をコアにすれば良いか読書力の復活をどうすれば良いか思案しているところであります。



『四聖の像』橋本雅邦作 明治28(1895)年

井上円了は「諸学の基礎は哲学にあり」として、明治20(1887)年に哲学館を創立した。哲学の重視は東京大学在学中の哲学祭にはじまり、哲学館、哲学堂と、生涯にわたり堅持した。

この『四聖の像』は井上円了が、哲学を東洋哲学と西洋哲学に大別し、東洋の中国哲学とインド哲学、西洋の古代哲学と近代哲学の四種類の中からそれぞれの代表者として、孔子・釈迦・ソクラテス・カントをその象徴として選び、古今東西の哲学者への報謝を表したものである。

毎年11月に中野区哲学堂公園において哲学堂祭を開催し、四聖についての講演を行っている。

作者・橋本雅邦(1835~1908)は岡倉天心や狩野芳崖などと明治の新日本画の建設につとめた人物として知られ、『白雲紅樹図』『竜虎図屏風』などの作品がある。

以上『東洋大学所蔵資料図録』より

良い出会いを求めて

思い出に残った本について、図書館ニュース「**KOΣMOΣ**」に原稿を書いて下さいと頼まれたとき、まずカール・セーガンの『コスモス』が頭に浮かんだ。タイトルもぴったりであるし、自然科学者を志すものであれば、読んでおいて頂きたいと思っているので紹介したい。「コスモス」とは宇宙の意味に加えて、カオスの反語として秩序ある社会をも意味している。カール・セーガンは宇宙の成り立ちと、人間（社会）と自然科学の関わりを両方をテーマに、この本を書いたのだと筆者は現在理解している。

今も家にある、かなり時の経過を感じさせるその本の裏表紙をめくると、昭和59年発行と記されている。「コスモス」というのだから宇宙の話ばかり書いてあると思って買って見たのに、科学の歴史に関する記述がとても多く、また書き方もいたって冗長に感じられた。そのため最初読んだときは、文庫本2巻約600ページの半分ぐらいが読み飛ばされてしまい、全部のページが開かれたのは暫くたってからだった。現在では、この本に書かれていることを学生に教える立場になっており、日本語訳が明らかにおかしいところが何ヶ所もあることに気づくが、このころの自分は、まさに研究者への扉を開けようとしていたところで、それらを全く疑問に思わず、また内容の本質を理解したなどとはお世辞にもいえなかったと思う。しかし、他の惑星における生物の存在についての記述は、好アルカリ性微生物の探索研究を堀越先生（本学名誉教授）のもとで行っていた私には、未知の生物の探求についての意欲を高めるために、とても役に立ったことを覚えている。自分の研究のゴールが時には遠くに感じられることがあったが、未知の生物の探索は魅力ある仕事なのだという先生の教えを、この本のおかげで素直に受け入れることができたと思っている。

また本書は、自然科学と人間社会との関わりについても、自分に教えてくれた最初のものである。自然科学に関するわれわれの知識は、人間の視点から自然を観察して事実を発見し、それをいかに解釈するかによって蓄積されるものであるが、（当然）事実の一つでありそれは永遠に変わることはない。しかしながら、その解釈の根源が変化すれば（人間社会が認知する）事実が変わることを、特に西洋における宇宙観の変遷

から学ぶことができた。キリスト教社会の神という絶対的なものの存在と、完全な秩序をもつべきであるという宇宙観へのこだわりのために、事実というさらに絶対的なものが否定されたことは強く印象に残った。このことは、先入観なしに実験結果を解釈することの重要性を理解するのに大いに役立っている。さらに、知識を継承することの大事さも、併せてこの本から学ぶことができた。例えば古くギリシャの識者たちは、太陽を中心として地球が公転することなど、すでに宇宙観に関する多くの事実を知っていたが、これらの膨大な事物が記されていた貴重な書物が、異民族の侵略により破棄され焼却されたために、人類はそれまでに得られた掛け替えのない知識を失ったのである。近代の人間社会の目覚ましい進歩は、知識の継承なしには遂げることができなかつたのは言うまでもないだろう。本学の皆様も図書館の所蔵品を大事に扱って、後輩のために貴重な資料を残しておいて頂きたい。

宇宙の広がりの中では地球も塵芥のようなものであり、もちろん人間は限りなく無に近い存在である。そして人間は宇宙の歴史の中では、瞬間に等しい時間のなかでその一生を終えていくことになる。しかし筆者は、時間の流れというのは相対的であって、その物体が生じてから消滅するまでの時間に依るのだと信じている。この信じるという行為は至極宗教的なものであり、科学者は根拠もなしに行うべきでないのだが、いかんせん人生の秩序のなさは、自分の信念も曲げてしまうほど歴大である。道標となるような良い本にめぐり合うことができれば、長い人生の道程はずいぶん行きやすくなるだろう。しかし、読んでみないことにはその幸運をつかむことはできない。それはまさに、良い友人や伴侶との出会いのようである。

福森 文康 (ふくもり ふみやす)

生命科学部生命科学科助教授
専門：分子生物学
東京水産大学大学院水産学研究所
修士課程修了。
農学博士。



Reading of paradise

Jazzに興味を持った学生時代に、後藤雅洋著の『ジャズ・オブ・パラダイス』（講談社α文庫）という入門書と同じゼミの友人が「いい本があるよ」と紹介してくれた。井の頭公園の池の水を清掃のために50年ぶりに抜くというので見物に行ったときだったのを憶えている。

巻頭に「少なくとも一〇〇枚ぐらいのアルバムの内容をしっかりと把握するまでは、自分の好みについての結論は出さないこと」とあり、その100枚も何でもいいわけではないと力説していた。放っておけば、本人は意識しなくても、たまたま出会ったごく狭い範囲の好みものに凝り固まる。それでは、新たな感動、未知なものに出会う喜びを求めて聞こうとしたジャズを、自分の出来合いの感性の色眼鏡を通して眺める結果になってしまう。そうならないためには、紹介している300枚のアルバムを「どんな順序でもいいから少なくとも一〇〇枚は聞け」と説く調子は説得力があった。

初心者であったがゆえに、素直に紹介されているアルバムを次々と聞き、聞いたタイトルの箇所に黄色い蛍光ペンでラインを引いていった。そのラインが100本を越える頃、確かにジャズの世界に対する理解が深まり、自分の好み、プレーヤーの好みが見えてきて、ジャズの楽しみも増していった。紹介されていたアルバムが、特定のジャンルに偏らないジャズの全体像を見渡すことができる選択だったことが大きかったのだろう。

読書の世界も似ていないか。読書は好きでも、自分が好きだと思いきこんでいるごく狭い範囲のジャンルしか読んでいない人が多いのではないだろうか。「読書の好み」を無視して、本という世界の全体像を見渡してみれば、未知のジャンルの中にも、きっと新たな感動が発見できる。

自分も高校時代までは、「一気読み」できるケレン溢れる小説ばかり読んできた。今もそういった本も好きだけれど、少し読み進んでは、また戻って考えるといったことを繰り返さざるをえない園ごたえのある本^{※1}にも魅力を感じている。

では、どうすれば、いろいろなジャンルの読書の楽しみを見出せ、新たな自分の「好み」を発見することができるだろうか。まずは、読書好きの友人に、何か面白い本はないか聞いてみよう。ゼミやサークル、語学のクラスで熱心に読書をしている人がいたら、

声を掛けてみよう。読書好きな人は、本について語るのも、お気に入りの本を薦めるのも大好きだ。読書好きな人が周囲に見当たらない場合は、書評^{※2}を参考にしてみよう。

新聞には毎週日曜日に書評欄があり、書評を掲載している雑誌の数も多い。こうした紙誌で採り上げられている本の中から、意識的に自分の好みの幅を広げたり、好みを無視して少しでも興味を持った本にチャレンジしていこう。新聞や雑誌はもちろん、こちらの図書館^{※3}でどうぞ。

途中で挫折する本もたくさん出るだろうが—その挫折した本を何年後かに読み直すと、面白く感じるようになっていたりする—何となく自分の好みで選んでいたら、出会わなかったジャンルや著者との出会いに感謝することも多くなるに違いない。そういった紆余曲折は無駄にはならず、これからの何十年もの読書生活を豊かにしてくれる土台になってくれる。

そうすると、本が本を呼ぶように、読みたい本が次々とあなたの前に待機しだして、「何か面白い本はないか」という暇もなくなる。長距離通学の列車の中や、大病院の待合室、人気ラーメン店での行列の時間も、「読書ができる」と歓迎するようになる。さらには、読んでいる時間だけではなく、あれを読もう、これも読もうと考えているときどころか、「さあ、読むぞ」と本を開く前の刹那さえも愉しく感じられたりもする。煙草を呑む人の喜びは、最初の一吸いでも、紫煙を吐き出したときでもなく、吸う前の火をつけようとする刹那にあるという話を聞いたことがある。そんな心境と似ているだろうか。

※1…例えば、最近読んだものでは、保坂和志『世界を肯定する哲学』（ちくま新書）、伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』（名古屋大学出版会）など。

※2…私が、日頃、参考している新聞は「毎日」「朝日」「日経」、雑誌は「本の雑誌」「週刊文春」「週刊ポスト」など。最近読んだ書評集で、読みたい本が溢れていたのは、狐『水曜日は狐の書評 日刊ゲンダイ匿名コラム』（ちくま文庫）。

※3…図書館という場所の楽しさが満喫できるのが、辻由美『図書館であそぼう 知的発見のすすめ』講談社現代新書。図書館が登場する魅力的な小説もたくさんある。瀬尾まいこ『図書館の神様』（マガジンハウス）、ボルヘス「パベルの図書館」＜『伝奇集』所収＞（福武書店）、エーコ『薔薇の名前』（東京創元社）、ブラッドベリ『華氏451度』（ハヤカワ文庫）、キング『図書館警察』（文春文庫）、村上春樹『海辺のカフカ』（新潮社）など。どれも面白い。

根岸 哲也 (ねぎし てつや)

東洋大学職員（経理部経理課）

negi@toyonet.toyo.ac.jp

東洋大学所蔵の一部紹介

タイトル	著者	所蔵館	請求記号
環境学	松尾友矩	工学部	508:I95
明治天皇(上・下)	ドナルド・キーン	朝霞	288.41:KD18
人口減少社会の設計	松谷明彦 藤正巖(共著)	白山	CS:1646
		朝霞	CS:1646
構造改革と日本経済	吉川 洋	白山	332.107:YH89
		朝霞	332.107:YH89

シリーズ名	所蔵館	請求記号
技術の歴史	白山	502:SC
	朝霞	502:SC
	工学部	502:G
コスモス/宇宙	板倉	502:SC8
	白山	440.8:SC
グランド・コスモス	工学部	440:SC
	白山	440:SC
	朝霞	440:G

※請求記号の3段目はキャンパスにより異なる場合があります。OPACで検索し、配架場所等確認してください。

表紙絵 紙題

表紙絵：『百人一首図巻』明治期写 1巻

紙高27.4cmの長巻。表紙薄灰茶絹織地で無模様。題簽金切箔押の短冊に「百人一首圖巻」とある。雲母の入った料紙楮紙に、極彩色で描かれた歌仙絵がある。歌仙絵は、百人一首の歌意に合わせての描法をとっているため、種々の姿態を描いている。歌意を汲んでの歌仙絵は、「錦百人一首阿づま織」にあるので、本書は、その影響下に描写されたものと思われる。本書の特色として、百人一首の順序が配列替されている点にある。巻頭に本来巻末に存する順徳院が置かれ、次に左京大夫道雅・凡河内躬恒・良暹法師と続くのである。この配列は何か目的があって並べ替えられたものと思われるが、今のところ不明とせざるを得ない。



東洋大学所蔵の百人一首

(本頁の百人一首解題は『東洋大学所蔵資料図録』および『東洋大学図書館所蔵百人一首並びに類書目録』より)

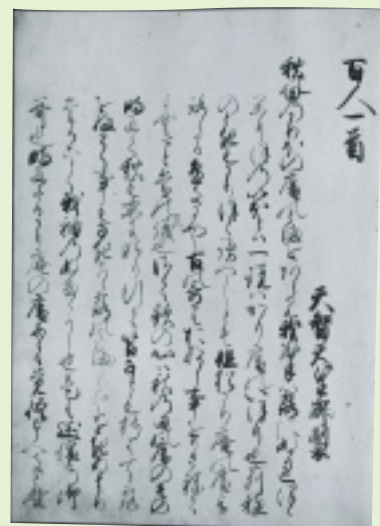


『姿絵百人一首』(絵本) 菱川師宣画 1冊

本書は、師宣 通称吉兵衛の遺作とされている。序・跋、刊記を欠くので複製本で補う。

師宣の絵本類は墨刷、半丁郭内(20.7×15.4cm)の約4分の1(5.2cm)ほどの上欄に文字、下に絵が定形化している。

師宣の描いた世界は、吉原や歌舞伎の頹廃優美なものから健やかな働く庶民の風俗画まで、いずれも伸びやかな美しい線を持つ。寛文から元禄という絵師と摺り師、版元という印刷文化と、絵本や浮世絵を見て楽しむ町民層の経済力が相俟った時代に活躍した師宣の最晩期の貴重な本である。



『百人一首抄』(宗祇抄) 伝仁和寺覚道筆 大和綴1冊

室町末期写。縦27.4cm、横21.2cm。表紙は白茶絹地に蔓草・草花などを緑・金・茶系による織文様。表紙見返し金銀切箔散し文様を施す美本。

本書は文明十年本系でも古写に属する写本であるので、貴重な1本である。

図書館とは、ひとことで、と言われたら自分としては、「いつも教えを請い初心にかえられるところ」といえるでしょう。そんなところへ、内外を問わず多く訪れたが、まず心配になるのは、入館手続きと目的の資料・文献（図書、雑誌など）がすぐ借り出せるかどうかです。以下に事例を述べて紹介の記としたい。

国内では、公共図書館には簡単に入館できるが、他大学の図書館は、大抵入館時に本学図書館発行の紹介状が必要でした。とくに、古典類、稿本類（貴重書扱いなど含め）を閲覧する場合、予約の必要な場合があります（例えば、早稲田大学図書館洋学文庫、京都大学図書館富士川文庫など）、その時は予約方法まで知っておく必要がある。このような手続きに慣れていれば、外国の図書館でも楽なような気がします。

さて、オランダでの体験ですが、以前ライデン大学の図書館で資料を調べたときは、留学していた知人の紹介で、大学の日本語学科の学生をアルバイトに頼み、資料を借り出したので楽でした。紹介者や助力者がいて資料を調査借り出せるようになるには、普段からの交流や図書館員に理解を得ることが大切だと思います。

今回のオランダの図書館訪問は、国内の大学図書館訪問方式で、本学図書館工学部分館発行の、英語の紹介状を持っての訪問でした。まず、めざす資料（史料）はアムステルダム大学図書館にあるはずと訪ねた。この図書館（写真1．アムステルダム大学図書館と名称プレート）で資料を借り出すには、所定の用紙に氏名・住所（本学英語の紹介状が役立つ）とパスポート番号などを書き、図書館利用カード（Lenerspas）を取得し利用しました。



写真1 アムステルダム大学図書館



名称プレート

検索は、東洋大学図書館情報システム（TRITON-OPAC）と同様な、アムステルダム大学図書館情報システムで行います（写真2．アムステルダム大学図書館での検索風景）。アムステルダム大学図書館以外のオランダ国内図書館蔵書の検索はNederlandse Centrale Catalogus(NCC)で行う。NCCはオランダ国内の主要図書館（約400）蔵書目録（約1400万冊の図書、50万の定期刊物など）をデータベース化したものです。これは本学図書館で利用できるNACSIS Webcat(国内の参加図書館・大学図書館などが所蔵する図

書・雑誌の総合目録データベース)での検索に当たるといえるでしょう。

まず、私は18世紀の薬学・化学書（蘭書）を検索して借り出した。その閲覧室はとくに古典・古書・稿本



写真2 アムステルダム大学図書館での検索風景

類などを専門とする資料調査室（Onderzoekzaal）で、入室者は氏名と住所を書く、いろいろな国の人たちが利用していました。マイコンの持ち込み、フラッシュなしでの資料撮影は許され、複写はマイクロフィッシュで頼むことができた。そこでのもう一つの体験は、書見台（スポンジ製大小あり）に本をのせ筆写していた時、厚い本で、本の開きを手を放すと閉じる状態でした。これを図書館員が見ていたのでしょう、ピーナッツ形状の重りを布で包み数珠つなぎにしたようなもの（蛇のようにくねくねするのでsnakeというそうです）をもってきて、開いた本の上のせて（本が閉じないように）読むことをすすめてくれました。古書とともに雰囲気感激しました。

また、アムステルダム大学図書館では他にインターネット検索やCD-ROM、マイクロフィルム資料、特別なコレクション（王室関係、教会、医学関係など）部門、70余類の収集品セクションなどの情報サービス、各学部一人文（文学・言語関係、芸術、神学、哲学、歴史関係等）、法学、理工、情報科学、医学、経済、社会福祉学部等の図書館（室）の蔵書もネットワーク化され利用されているといえます。他にハーグの中央国立公文書館やライデンのプールハーヴェ博物館、ロッテルダムの海洋博物館などで見聞しましたが、ともかくく分からなかったら尋ねるを厭わなかったことが収穫につながったと思っています。

菅原 国香 (すがわら くにか)

工学部応用化学科教授
専門分野：化学史、科学史、無機分析
東京学芸大学理科(化学専攻)卒業
研究：科研費テーマ「近世から近代に至る日本の化学用語の起源と定着過程の総合的研究」(平成15年度)でオランダへ資料調査

